

3 花 き

項 目	作 業 内 容
<p>(1) デルフィニウムの栽培管理</p>	<p>(今月の作業のポイント)</p> <ul style="list-style-type: none"> デルフィニウムの栽培管理 バラの冬季の温度管理 花壇苗の播種・育苗 シクラメンの播種 花き類の防寒・省エネ対策 <p>デルフィニウムの一番花の出荷予定時期は、12月上旬となるため、次の栽培管理に注意する。</p> <p>ア 水管理と二番芽の整理</p> <p>株元から発生する二番芽の萌芽・伸長を促すために、8割程度の採花が完了するころに一度たっぷりかん水する必要がある。新たに発生した芽は株当たり3～4本とし、弱い芽は早めに除去することで二番花の品質向上を目指す。</p> <p>なお、肥料は窒素成分で5～6kg/10aを2週間に1回程度施用する。</p> <p>イ 温度管理</p> <p>栽培温度は、二番花の出荷を2～3月に計画しているため、採花期間中も基本的には12～14℃加温とするが、株の充実が悪い圃場ではやや低めに管理する。また、定植時の高温等で苗が障害を受け、極端に株の生育が劣る栽培圃場では、採花後は二番芽の伸長を抑制するために1ヵ月程度ハウスを開放する。これにより、切り下株を自然低温に十分遭遇させ、二番芽の充実と活性化を図り、二番花の開花は予定より遅くなるが切り花品質は向上する。</p> <p>ウ 病害虫</p> <p>うどんこ病や灰色かび病の発生とナメクジの食害に注意し、適切な防除を心がける。</p>



写真1 採花時期を迎えたデルフィニウムの一番花

項 目	作 業 内 容
(2)バラの冬季の温度管理	<p>バラの営利生産での好適夜温は 16～20、昼温は 23～27 と品種によって異なるが、実際には複数の品種が同一温室内で栽培されているため、これらの中間的な温度管理を行う。</p> <p>多くの品種は、夜温が 16 より低くなるとブラインド枝の発生増加や到花日数の延長により収量は減少し、さらに低温下では、ブルヘッドやブラックニング等の奇形花が発生する。</p> <p>そこで、冬季は温室内の内張りの徹底や多層化を図りながら保温力の向上に努め、夜温 16 以上を確保する必要がある。また、ブラインド枝の発生は寡日照下で助長されるため、温室の汚れた被覆フィルムは洗浄するか交換し、内張りカーテンには透光性に優れた資材を利用する。</p>
(3)花壇苗の播種・育苗	<p>3～4月出荷用の花壇苗の播種・育苗作業が 12 月から始まる。花壇苗は季節を先取りして生産されることが多く、特にこの時期からは低温期となるので温度管理が重要になる。</p> <p>ア 発芽床の準備</p> <p>通常、植物の発芽適温は生育温度より幅が狭いため、低温期は温度管理が簡便な電熱温床やマットなどを利用して、集中的に管理する必要がある。</p> <p>温床線は 3.3 m²あたり 250Wとなるように敷設する方式が一般的である。電熱温床の構造は図 1 を参照。</p> <div data-bbox="590 1388 1324 1635" data-label="Diagram"> </div> <p>排水のためまん中をやや高くする</p> <p>図 1 電熱温床の構造</p> <p>イ セル成型苗の育苗管理</p> <p>育苗期間の短縮や移植の簡素化、苗揃いの均一化を図るため、セル成型苗育苗が現在主流となっている。花壇苗の育苗では一般に 288 穴と 406 穴のセルトレイを主に用いる。</p> <p>播種用土は市販の調整ピート（マトミックス、プラグミックス等）を利用し、育苗専用の緩効性肥料（マイクロングト列等）をあらかじめ</p>

項 目	作 業 内 容																																								
(4)シクラメン の播種	<p>じめ用土に混合しておくと言育苗中の液肥管理の省力化が図れる。</p> <p>播種後は発芽床内で発芽適温を保ち、発芽がそろった段階で育苗温室にトレイを並べて管理する。多くの品目では30～40日で移植可能となる。なお、品目により発芽、育苗条件が異なるので注意する。(表1)</p> <p><u>表1 主な春出荷用花壇苗の発芽、育苗条件</u></p> <table border="1" data-bbox="475 660 1206 929"> <thead> <tr> <th>品 目</th> <th>発芽 光条件</th> <th>発芽適温 ()</th> <th>発芽日数 (日)</th> <th>生育温度 ()</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>サルビア</td> <td>好</td> <td>22</td> <td>10～15</td> <td>15～30</td> </tr> <tr> <td>ピンカ</td> <td>嫌</td> <td>25</td> <td>7～14</td> <td>15～30</td> </tr> <tr> <td>ペチュニア</td> <td>好</td> <td>20～30</td> <td>10</td> <td>10～30</td> </tr> <tr> <td>インパチエンス</td> <td>好</td> <td>20</td> <td>10～18</td> <td>15～30</td> </tr> <tr> <td>アゲラタム</td> <td>好</td> <td>20</td> <td>5～8</td> <td>10～25</td> </tr> <tr> <td>ゼラニウム</td> <td></td> <td>25</td> <td>7～10</td> <td>5～25</td> </tr> <tr> <td>ペゴニア・センパフローレンス</td> <td>好</td> <td>20</td> <td>15</td> <td>10～30</td> </tr> </tbody> </table>	品 目	発芽 光条件	発芽適温 ()	発芽日数 (日)	生育温度 ()	サルビア	好	22	10～15	15～30	ピンカ	嫌	25	7～14	15～30	ペチュニア	好	20～30	10	10～30	インパチエンス	好	20	10～18	15～30	アゲラタム	好	20	5～8	10～25	ゼラニウム		25	7～10	5～25	ペゴニア・センパフローレンス	好	20	15	10～30
	品 目	発芽 光条件	発芽適温 ()	発芽日数 (日)	生育温度 ()																																				
サルビア	好	22	10～15	15～30																																					
ピンカ	嫌	25	7～14	15～30																																					
ペチュニア	好	20～30	10	10～30																																					
インパチエンス	好	20	10～18	15～30																																					
アゲラタム	好	20	5～8	10～25																																					
ゼラニウム		25	7～10	5～25																																					
ペゴニア・センパフローレンス	好	20	15	10～30																																					
(5)花き類の防 寒・省エネ対 策	<p>中鉢(5号鉢)生産では、翌年の年末出荷を目標とする場合、12月中に播種する必要がある。播種は200穴のセルトレイを用い、用土は市販の調整ピート(マトミックス、プラグミックス等)を使用する。</p> <p>種子は出荷予定鉢数の2倍の粒数を準備する。種子消毒は次亜塩素酸ソーダ5%に3時間浸漬し、その後一昼夜流水洗浄処理してセルトレイに1粒ずつ播き、5mm程度覆土する。</p> <p>シクラメンは嫌光性種子で発芽まで暗黒条件化で管理する必要があるため、播種したトレイは数段重ね、シルバーポリ等で梱包して発芽まで管理する。発芽適温は18(15～20)で、播種後25日頃から発芽を開始する。なお、25以上の高温条件下では発芽障害が起こり、10以下では発芽率が低下するので温度管理には十分注意する。</p> <p>子葉の出芽を確認したら被覆を取り除いてセルトレイをベンチに広げ、寒冷紗下で1週間程度順化し、最低夜温15程度で管理する。</p> <p>12月の気温は、平年並または高い予報(11月24日、高松地方気象台発表)であるが、急激な温度低下に備え、施設栽培における防寒対策は次の事項を参考にする。</p> <p>ア 温室を総点検し、補修と目張りを行う。内装カーテンは</p>																																								

項 目	作 業 内 容
	<p>二層被覆とし放熱を防ぐ。ただし、気密性が高まると湿度も高くなるため、べと病や灰色かび病の発生に注意する。</p> <p>イ 寒風の直接の影響を抑えるため、温室の風上側に防風ネットを設置する。</p> <p>ウ 温室内の北側の側面や妻面等日射量の影響の少ない壁面に反射マルチを被覆し、隙間からの放熱を防ぐとともに反射光を有効利用する。</p> <p>エ 温度ムラを少なくするために、循環扇の設置や温風暖房機のダクトの配置、風量を調節する。</p> <p>オ 外部被覆としては、温室のサイド、妻面などの隙間を防ぐため、全体をポリエチレンフィルムで二重張りにする。さらに、温室サイドの下部や北側の妻面を発泡スチロール板で覆い、断熱材として利用することも有効である。また、アルミ温室のサッシ部分を発泡スチロールで覆い、金属部分からの放熱を少なくすることで、5%前後の省燃費効果がある。</p>